

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

雙

魔法の物語を書こうと思ったのは、本当にふとしたことからだった。当時中学生だった娘が描いた魔法の絵を見て、①「なんだか面白そうと思ったのがそもそもの始まり。その絵は魔法の定番そのもので、黒いマントを着た、鷲鼻の魔法が後ろに猫をのせて飛んでいる絵だった。でもほうきの形が少し違っていた。ほうきのふさにはお下げ髪のような三つ編みがまじって、先にむすばれたリボンが、風になびいていた。またほうきの柄にはラジオがつるされて、そこから漫画の吹き出しのように音符が飛び出していた。私にはほうきのふさを三つ編みにする魔法のおしゃれが新鮮に見えた。またこの魔法はラジオから流れる音楽を聴きながら、踊っているような気分で飛んでいるんだらうなと思った。その頃、私の娘もなにをするにも音楽を聴きながらやっていた。宿題も、本を読むのも、絵をかくのも、それで身に付くのかと、私は不安にもなり、その反面、私にはまったく無縁のこの②「ちやかちやかした芸当が、ちよっぴりうらやましくもあった。

この絵をみて、ふと娘のような現代の子の魔法を主人公に物語を書いてみようかなと思った。するとすぐ私の目の前に、飛行機がランディングする直前の町の風景が広がって見えてきた。学校のプールがマッチ箱のように見えたり、高速道路のインターはぐるぐる丸い花丸のように見える。このちよつと高い所から見ると風景には日常見慣れているとは違う不思議や、面白い物語が隠れていそうな気がして、何度見てもこの瞬間の景色にはわくわくさせられる。

学生のころ、六本木にあったアメリカ文化センターに、なかなか見られない最新版の雑誌、「ライフ」や「ニューヨーカー」、「ハーバース・バザー」などがそろっていた。私はそれを見に行くのが楽しみだった。とくに「ニューヨーカー」の一ページマンガのユーモアがわかったときなんかはすこくうれしかった。

あるとき、「ライフ」に鳥の目の高さから撮影されたニューヨークの写真が何ページかにわたってのっているのに出会った。どれもモノクロームで、とても美しかった。なにげない鉄の階段も、摩天楼のビルの屋根一つ一つも、なにか特別なことを語りかけてくれているように見えた。その風景は現実にあるニューヨークだというのは、この世のどこにもない都会のように感じられた。秘密も、冒険も、どんな不思議なことでも、いっぱい詰まっているように思えた。しばらく見とれて、この町をさまざま自分想像し楽しんだ記憶がある。

魔法の話を書けば、③「あんな景色のなかを私も魔法のように飛べる。飛ぶつもりにならなかつたら書けないはずだから。これはきつともすこく楽しいときを過ごせるにちがいない。どういう物語にしよう、なんて考える前に、ぞくぞくするほど飛べるのがうれしくなり、「のせて」と叫ばんばかりにほうきのふさに飛びついてしまった。だから魔法の魔法に特別な関心があったわけではなかったのだ。

伝統的な魔法の姿をちよつと借りて、娘と同じ年の女の子の魔法を書いてみよう、そう考えた。せつかく飛べるのだから、宅急便屋さんをする女の子がいいかもしれない。気持ちちはもう飛んでいたから、いろいろ決めるのも早い。それでは主人公に名前をつけてあげなければ……するとそこで私の「ア」気持ちちがとまってしまった。どうしてもいい名前が思いつかないのだ。「A私は名前が決まらないと、なにも書けない。××さんにしておいて、まず書きはじめてみたらと思うこともあるけど、それがどうしてもできない。

小学校一年生のときに、私は上手に学校デビューができてなくて、毎日学校に行くのに大変な努力がいった。幼稚園はいい、でも学校は法律でできまっているのだから、どんなことがあっても行かなければいけないのだよと、毎朝学校行きをぐずる私に手を「イ」ていた大人たちは口々にいった。父はいろいろ工夫を「ウ」て、なんとか学校につれていこうとした。あるときは、自転車の前に座布団をのせ、そこに私を乗せると、「おんまさん乗りたいよ」といったり、またあるときは、後ろの荷台に私を立たせ、「紙芝居やさん乗りたいよ」と誘ったりした。子ども心にも④「父の気持ちにそいたいと、やっとの思いで校門を「エ」。でもいつも机の陰に隠れるようにしていた。手をあげるのではなく、出席をとられるときも⑤「のなくような声しか出ない。もっているのが我慢できないと思つたら、ない知恵を「オ」て、嘘を考え、先生をこまかして、早引けをしてしまう。自分でも情けないぐらい、だめな子どもだった。あのころついた嘘というのは、単純だけど、必死だっただけとても趣向が「カ」れていたと思う。

ある日、なんのひょうしだったか、「栄子ちゃん」と受け持ちの先生が呼んだ。私はびっくりした。学校ではいつも「角野さん」と呼ばれていたから、先生はこんな情けない私の名前なんて知らないと思つていたので。今思うと、子どもの心つて⑥「こわいような不思議を抱えているものだ。こんな問題のある子の名前だったら先生は真つ先におぼえてしまうはずなのに。子どもって自分に自信がもてないと、だから自分みえていないのだと思ひこんでしまうのだと思う。大人はそこまでなかなか気がつかない。

「先生はわたしのこと知っていてくれたんだ！ 知ってくれたんだ！」私はいれしくつて、ぴよんぴよんはねながら家に帰って、「おとうさん、おとうさん、あのね、先生がわたしのこと『栄子ちゃん』ってよんでくれたのよ。先生はね、わたしの名前を知つてたのよ」といった。すると、父は笑いながら、「おまえはかわいい子だから、先

生が名前をおぼえていくださるのはあたりまえだよ」といった。うれしかった。二重にうれしかった。そのときのうれしさは忘れられない。こんな思い出があるせいか、物語の中の人物の名前も、その人にふさわしいものをつけたい。絶対これだなければだめという、たった一つの名前を探したいのだ。これにはさうとうこたわる。

『魔法の宅急便』というタイトルはすでにあるのに、主人公の小さな魔法の名前はなかなか決まらなかった。かわいいなにも魔法っぽさがあつて、それに小さな読者にも友達のように呼んでもらえる名前、そんなことをあれこれ考えて、音が二つ重なるのがいいと思いつくまでに、だいぶ時間がかかってしまった。彼女が飛ぶ町の風景も目に浮かぶのに、お供になる猫の名前も先にジジと決まったのに。ミニミナ、ココ……いろいろ並べても、まだまだびつたりこない。そしてやつと「キキ」と出会えた。⑦「鍵がびたりとあつて、扉がむこうにさつと開いた瞬間だった。

⑧「名へキキ」 やれやれ、よかつたと思つたとたん、キキはもうずつと前からいたように、私の脇にならんで立つて、もう「さあ、とぶわよ」と身構えはじめた。

(角野栄子『ファンタジーが生まれるとき』より)

問一 線①「なんだか面白そうと思った」とありますが、その理由にあたる部分を文中から十五字以内でぬき出しなさい。(句読点も一字に数えます。)

問二 線②「ちやかちやかした芸当」について、

- (1) 何を指しているか、答えなさい。
(2) このように表現した筆者の気持ちを説明しなさい。

問三 線③「あんな景色」とはどのような景色か、五十字以内で説明しなさい。(句読点も一字に数えます。)

問四 「ア」にふさわしい言葉を次の「 」から選び、文にあてはまる形に直して答えなさい。(同じ言葉を二度使ってもよい。)

- くぐる ・ たたく ・ しぼる ・ はやる
うつ ・ こらす ・ つかう ・ やく

問五 線④「父の気持ちにそいたい」とありますが、「私」はなぜこう思ったのか、説明しなさい。

問六 線⑤「のなくような」の「 」にあてはまる一字の語を答えなさい。(ひらがなでよい。)

問七 線⑥「こわいような不思議」から読みとれる気持ちの説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 問題のある子を助けようとしているのに、そんな大人の気持ちを理解しない子どものがんこさに絶望する気持ち。
イ 子どもは大人の想像もおよばないほどきつやすく、デリケートな考え方をするものだと改めて思い知る気持ち。
ウ 自分を「みえない存在」だと思ひこむような、大人とはちがう感覚を持つ子どもの力をすこいと思う気持ち。
エ 心を閉ざしていたはずの子どもが大人のちよつとした言葉ですぐ元気になるという変化の激しさが理解できない気持ち。

問八 線⑦「鍵がびたりとあつて、扉がむこうにさつと開いた瞬間だった。」とはどのようなことをたとえているのか、説明しなさい。

問九 ⑧「名」は「名前をつけること」という意味の言葉です。「 」にあてはまる漢字一字を答えなさい。

問十 「A私は名前が決まらないと、なにも書けない。」と筆者は言っていますが、それはなぜですか。文章全体から読みとつて説明しなさい。

葉 一 一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 人間は毎日生活している間に、「あれ、ふしぎだな」と思うときがある。それにも大小さまざまがあり、ふしぎだと思いつつすぐ心から消えてしまうのと、① そのふしぎを追究していきたくなると、相当に程度の差がある。

非常に簡単な例をあげよう。夜中に② 目を覚ますと、ビーンと変な小さい音が聞こえる。「あれ、ふしぎだな」と思う。それが気になって眠れない。③ 起き出して、音を頼りに調べてみると、「なあーんだ、冷蔵庫の音だったのか」とわかって安心する。「ふしぎ」ということは、人間の心を平静にしておかない。「わかった」という解決の体験があつて平静に戻る。

電車に乗っていると、赤い帽子に赤い靴、鞆まで真赤という服装のおじさんが乗ってくる。「あれ、ふしぎな人」と思うが、おじさんがどこかで降りてしまうと、「変な人だったな」と思い、それで忘れてしまう。この際は、「わかった」というところはないが、「変な人」ということで、自分の人生にかかわりのない事柄として、心の中から排除してしまうことにより、心の平静をとり戻す。

④ 平静をとり戻したのに、翌日⑤ 違うところで電車に乗っていると、また例のおじさんがやってきた。こうなるとそのままではおれない。「偶然だ」、「あんな服装流行しているのかな」、「あのおじさん、僕をつけているのかな、まさか」などと心がはたらきはじめる。つまり、人間というのは「ふしぎ」を「ふしぎ」のままでおいておけない。何とかして、それを「② 心に収めたい」と思う。

大人になって毎日同じようなことを繰り返していると、あまり「ふしぎ」なことではなくなってくる。何もかもわかったような気になると、今度は面白くなくなってきた、「ふしぎ」なことを提供してくれるA テレビ番組や催しものなどを見る。これらは必ず「ふしぎ」なことが最後には心に収まるようになっていて、少しの間心をときめかして、後は安心、ということになる。

「ふしぎ」の反対は「あたりまえ」である。大人はだいたい「あたりまえ」の世界に生きている。ところが、それを「あたりまえ」と思わない人がいる。

リンゴが木から落ちるのを見て、「ふしぎだな」と思った人がいる。この人はそれだけではなく、その「ふしぎ」を追究していつて、最後は「万有引力の法則」などという大変なことを見つけ出した。リンゴが木から落ちることは、それまで誰にとつても「あたりまえ」のことだったのに、B ニュートンにとつては、それを「心に収める」のに大変な努力が必要だった。そして、彼の努力は人類全体に対する大きい貢献として認められた。

「人間は必ず死ぬ」。これもあたりまえのことである。しかし、これをあたりまえと思わず、「人間はなぜ死ぬのか」と考え続けた人がいる。B 釈迦牟尼は、それを心に収めるために、家族を棄て、財産も棄てて考え抜いた。彼の努力の結果、仏教という偉大な宗教が生まれてきた。これも人類に対する偉大な貢献となった。

このように考えると、「ふしぎ」と人間が感じるのは実に素晴らしいことだと思われる。特に他の人たちが「あたりまえ」と感じていることを「ふしぎ」と受けとめる人は、なかなか偉大である、と言えそうである。

C 小さな人はどうだろう。この人も「人間が死ぬ」という「ふしぎ」に心をとられた。それを解決しようとして、仏教やキリスト教や、あれこれの本を読んだ。しかし、どれも満足できないので、何かにつけ他人に問いかけるようになったし、この大きい「ふしぎ」に取りつかれているので他の仕事にあまり手がつかなくなった。そして残念ながら、この人は周囲の人たちに敬遠され、ますます孤独になって心の状態までおかしくなってきた。こうなると、この人は「嫌われ者」になってしまう。

「他の人はごまかして生きているのに、自分だけが考えるべきことを考えている」などというので、こんな人はますます嫌われる。それは「ふしぎ」を自分の力で心に収めることをしないだけではなく、せつかく平安に生きている人の心を乱すので嫌がられるのである。「ふしぎ」と思ったからには、自分でそれを追究していく責任がある。子どもの世界は「ふしぎ」に満ちている。小さい子どもは「なぜ」を連発して、大人に叱られたりする。しかし、大人にとつてあたりまえのことは、子どもにとつてすべて「ふしぎ」と言っているほどである。「雨はなぜ降るの」、「せみはなぜ鳴くの」、あるいは、少し手がこんできて、飛行機は飛んで行くうちにだんだん小さくなっていくけど、なかに乗っている人間はどうなるの、などというのものもある。これらの「はてな」に対して、大人に答を聞いたり、自分なりに考えたりして、子どもは、自分の知識を貯え、人生観を築いていく。

六歳の子ども、おおたにまさひろ君の詩につきのようなものがある。

- ③ おとうさんは こめややのに あさ パンをたべる

こんなものを見ると、「人間てふしぎなものだな」と思ったりする。日常の「あたりまえ」の世界に、異なる角度から照らす光源ができて、それによって今まで見過ごしてきたこと

に注意を向けられたり、関心を寄せたりする。④ 子どもの「ふしぎ」に対して、大人は時に簡単に答えられるけれど、一緒に「ふしぎだな」とやっているのと、自分の生活がそれまでより豊かになったり、面白くなったりする。

子どもは「ふしぎ」と思う事に対して、大人から教えてもらうことによつて知識を吸収していくが、時に自分なりに「ふしぎ」な事に対して自分なりの説明を考えつくときもある。子どもが「なぜ」ときいたとき、すぐに答えず、「なぜでしょうね」と問い返すと、面白い答が子どもの側から出てくることもある。

「お母さん、せみはなぜミンミン鳴いてばかりいるの」と子どもがたずねる。「なぜ、鳴いてるんでしょうね」と母親が応じると、「お母さん、お母さんと言って、せみが呼んでるんだね」と子どもが答える。そして、⑤ 自分の答に満足して再度質問しない。これは、子どもが自分で「説明」を考えただろうか。

それは単なる外的な「説明」だけではなく、何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ちもそこに込められているのではなからうか。だからこそ、子どもは自分の答に「納得」したのではなからうか。そのときに、母親が「なぜって、せみはミンミンと鳴くのですよ」とか、「せみは鳴くのが仕事なのよ」とか、答えたとしても「納得」はしなかったであろう。たとい、せみの鳴き声はどうして出てくるかについて「正しい」知識を供給しても、同じことだったろう。そのときに、その子にとつて納得のいく答というものはある。

「そのときに、その人にとつて納得がいく」答は、「物語」になるのではなからうか。せみの声を聞いて、「せみがお母さん、お母さんと呼んでいる」というのは、すでに物語になっている。外的な現象と、子どもの心のなかに生じることがひとつになって、物語に結晶している。

(河合隼雄『物語とふしぎ』より)

問一 線①「人間は毎日生活している間に、『あれ、ふしぎだな』と思うときがある。」とありますが、その「ふしぎ」という状態からどのようにして平静をとり戻すと筆者は言っているか、説明しなさい。

- 問二 線②「心に収めたい」をわかりやすく言い換えなさい。
- ア ふと イ せつかく ウ あくまで
- エ まったく オ どうどう

問三 線③「おとうさんは こめややのに あさ パンをたべる」の詩について、この詩から読みとれるまさひろ君の気持ちを説明しなさい。

問四 線A、Cの人について、次の問いに答えなさい。

- A 「テレビ番組や催しものなどを見る」人
- B 「ニュートン」「釈迦牟尼」
- C 「小さな人」

- (1) A「テレビ番組や催しものなどを見る」人がB・Cとちがう点を二つ答えなさい。
- (2) B「ニュートン」「釈迦牟尼」がA・Cとちがう点を二つ答えなさい。

問五 線④「おとうさんは こめややのに あさ パンをたべる」の詩について、この詩から読みとれるまさひろ君の気持ちを説明しなさい。

問六 線⑤「子どもの『ふしぎ』に対して、大人は時に簡単に答えられる」とありますが、この理由としてあてはまるものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大人は「物語」をつくるのが得意だから。
- イ 大人は子どもに比べて知識が豊かだから。
- ウ 子どもの「ふしぎ」は、大人にとつてあたりまえのことが多いから。
- エ 大人も子どもと同じように「ふしぎ」にいつも関心を持っているから。
- オ 大人は子どもに嫌われないよう、「ふしぎ」に対する答を用意しているから。

問七 線⑤「自分の答に満足して再度質問しない。」とありますが、なぜか、説明しなさい。

三 解答用紙に示した1〜9のグループには一つだけ□の漢字が他と異なるものがあります。それを選び、例にならつて、—線のカタカナをすべて漢字に直しなさい。

- 例 理科のジツケン
- 病院のケンサ
- 火の元のテンケン

実験

1 法案がヒケツされる。  
敵とタイケツする。  
必要フカケツと考える。

2 算数でヌケイを描く。  
彼は関西人のテンケイだ。  
ここはなだらかなチケイだ。

3 試合中に足をフシヨウする。  
多くのシヨウガイを乗りこえる。  
部屋のシヨウジを開ける。

4 冬山のセキセツ量を測る。  
数々のジツセキを上げる。  
立方体のタイセキを求める。

5 セントウを走る。  
新しい勢力がタイトウした。  
エベレストにトウチヨウした。

[ ]

[ ]

[ ]

[ ]

[ ]

6 オウフクのきつぷを買う。  
フクシンの部下を失う。  
国語のフクシユウをする。

7 作戦のセイコウ。  
葉のコウノウ。  
作業のコウリツ。

8 テキセツな判断をする。  
前方のヒヨウテキをねらう。  
新しい土地にテキオウする。

9 オリガミでツルを作る。  
オリメ正しいあいさつをする。  
毛オリモノのコートを着る。

[ ]

[ ]

[ ]

[ ]

平成二十三年度

国語

雙

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十
	(1)	(2)	ア					名	
			イ						
			てウ						
			てエ						
			オ						
			てカ						
			れて						

15

50

のなくような

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
	1		(1)			
	2		(2)			
	3		②			
	4		①			
	5		②			
			①			

一

(裏に続く)